

横須賀軍港水道を歩く(海老名地区)

●横須賀軍港水道とは

日露戦争に勝利した日本は、極東における新たな権益獲得により、海軍力の増強が必要となったため、海軍の重要な根拠地である軍港都市横須賀では、軍需工場である「海軍工廠」をはじめとする海軍施設の急増に伴い水道水の不足が発生した。

当時、横須賀市では、市内南東部に位置する「走水水源地」から取水を行う走水配水系統により、市民に水道水を供給していた、この水道水を海軍施設も利用していたが、海軍は、海軍施設へ安定的に水道水の供給が可能な、新しい配水系統の建設を独自で計画し、相模川支流の中津川で取水地点の現地調査を実施し、愛川町半原の石小屋付近で取水を行うことを決定した。

この、半原の石小屋付近を取水地(以下『半原水源地』)とする配水系統を「横須賀軍港水道・半原系統(以下『水道みち』)」といい、半原水源地から取水した水道水は、総延長五十三キロメートルにおよぶ水道みちの地下に埋設されている水道管を通して、横須賀市の北東部に位置する逸見(へみ)浄水場まで送られ、海軍施設に供給された。

●水道水の送水方法について

水道みちの取水口は、現石小屋ダム下流約二百メートル付近にあり、ダム建設前は「中津溪谷」と呼ばれた景勝地であった。

取水した水は、下流約五百メートルに位置する沈殿池へ送られ、二昼夜沈殿処理後、自然流下方式により愛川・厚木・海老名・綾瀬・藤沢・鎌倉・逗子を通り横須賀へ向けて送水が開始された。

沈殿池とは、取水した水に混じっている砂、流木、ごみなど大きな粒子を沈めて除去する施設で、自然流下方式とは、送水ポンプを使用せず、起点の半原水源地と終点の逸見浄水場の標高差約七十メートルを利用して送水する方式である。

●上郷水管橋

水道みちは、相模川に架けられた「上郷水管橋」により、海老名へ渡り、愛甲郡から高座郡へ移る。

水管橋には、水道管を単独で架設する「独立水管橋」と道路橋などの側面に設置する「添架水道橋」があり、上郷水管橋は独立水管橋で、愛川町田代の中津川に架かる馬渡橋を通る水道管は橋の上に設置されてはいるが添架水道橋に分類される。

上郷水管橋は、橋長が四九七メートル、幅員三・六メートルである。

橋の構造は、橋脚と橋脚の間の上に、耐久力のあるトラス構造という、三角の骨組みを組んだアーチ型の構造物が十基あり、一つの長さが四十九メートルで、これに十を掛け算した合計が橋長になる。

この橋の材料は鋼鉄で、八基ある橋脚は鉄筋コンクリート製のがっしりとしたものが設置されている。

この橋に直径五百ミリの水道管が設置されている。

海老名側の支柱に「大正七年(一九一八)三月竣功、横河橋梁製作所東京工場製作」のプレートが設置されている。

横河橋梁製作所(現株式会社横河ブリッジ)は、創業が明治四十年(一九〇七)二月で、会社創業初期に手掛けた大型工事といえる。

現在、海老名・厚木側両面共、鉄製の柵が設置されていて進入できないが、海軍が管理している時代には、許可を得て人や馬(徴発馬)が通行していた。

上郷水管橋は、竣功から百年以上が経過し、半原系統の廃止にとともに水管橋の役目は終えたが、現在も朽ち果てることもなく往時の威容を感じることができる。

●海老名の横須賀軍港水道

厚木市から、上郷水管橋を渡ると、そこは有鹿神社(上郷一丁目)の北側で、ここから、快晴の日に対岸の厚木側を眺めると、水管橋とその後方にある厚木市環境センターが一体化した風景は美しく感動する。

有鹿神社の北側から、水道みちは南東方向へ進み、「海老名耕地」と呼ばれる広大な水田地帯を斜めに約二キロメートルを直線で縦断している。

その途中には、JR相模線と交差し、踏切の下を水道管が通っている。

この線路が敷設される時に、JR相模線の前身である相模鉄道株式会社から横須賀鎮守府に「土地有償使用並びに橋梁設置申請書」が提出された。

この申請書は、相模鉄道が大正十五年七月三十日に着工した厚木・橋本間の延伸工事に伴い提出されたものである。

この申請に対して、昭和四年(一九二九年)三月二十六日付で横須賀鎮守府司令長官から同社取締役社長南俊二宛に許可書が交付された。

鉄道敷設工事実施に当たり、地下の水道管を損傷しないよう保護するため、「水道防護橋梁」を築造した。

水道防護橋梁とは、重い荷重に水道管が耐えられるよう、太さ約十八センチ、長さ約五・四メートル松丸太基礎杭六本を打ち基礎を頑丈に固め、両端の側壁を厚い鉄筋コンクリートで構築した鉄道橋である。

この踏切は、鉄道のほか県道四十号横浜厚木線も交差していて、水道防護橋梁は、戦後、自動車の普及に伴う交通量の増加にもかかわらず持ちこたえてきた。

水道みちは、JR相模線の踏切を通過後、小田急線の高架下を通り、JAさがみ海老名グリーンセンター(大谷二四六番地)の北側を通過後、大谷南一丁目付近に到達すると方向を真東へ変えて東名高速道路方面へ向う。

大谷南一丁目付近から上り坂で、上り終わると東名高速道路まで平面である。

上り坂の途中で、山を掘削して切り開いたような区間が約三百メートルあり、開発がされていないため、水道みち建設当時の原風景を想像させる。

東名高速道路には、吉久保橋という橋が架かっていて、その橋の桁下に添架されている水道管を通過後、約百メートル下って国分寺台第四公園前交差点に到達する。

ここから、綾瀬市吉岡まで、アップダウンを繰り返して、目久尻川を通過後、再び上っ

て藤沢方面へ向かって進んでいく。

●海老名の横須賀軍港水道建設工事の事情

海老名における工事は、大正五年から開始された。工事施工の中で特記したい点があるので紹介する。

海老名市史「大正五年、横須賀海軍水道工事に関する民有地砂利採掘願(四九九頁～五〇一頁)」には、**鍵渡嘉七所有地**の、上郷字向河原二七八九番の一及び二七八九番の三で、**水野甚次郎**がこの土地から砂利を採取し、これを買取る経緯の史料が記載されている。

この史料で水野甚次郎は、「右者横須賀軍港水道新設工事の内、送水鉄管線路(海老名村地内)築造工事請負人なる事を証す」と書かれている。

この記述から水野甚三郎は、海老名における水道みち建設工事の請負人であることが確認できる。

水野甚次郎は、広島県を本拠とする土木請負業者「水野組(現五洋建設)の代表者で、当時、広島県呉、長崎県佐世保、京都府舞鶴の軍港のほか各地の港土木工事を手掛け成功させていた。

海老名の水道みちは、軟弱地盤の水田地帯と南東部の高低差がある地形では、相当な難工事が想定されたため、海軍は、当時、軍港築造に多くの施工実績があり、高い技術力を有する民間工事業者を選定し、工事を施工する方法をとったと推測される。

●戦争拡大に伴う水不足が発生

昭和六年(一九三一)九月十八日、満州事変に端を発して戦争はさらに拡大し続け日中戦争、太平洋戦争に発展した。

戦争の拡大とともに、横須賀海軍工廠は大型空母「信濃」をはじめとする軍艦の建造や戦闘激化にともなう修理が増加し、海軍工廠では、さらに大量の水が必要となった。

この水不足対策として、海軍は半原水源地の送水能力を上げるため送水ポンプを設置し、また、逗子市沼間にポンプ場を新設した。

それでも水が足りず、新たな水源確保のため、高座郡有馬村社家(現海老名市社家)で相模川から取水を行う「**有馬系統**」の建設を決定し、昭和十四年(一九三九)八月一日に工事を開始した。

横須賀市は昭和十一(一九三六)年八月十一日、海軍の水不足に対して、県営水道から通水を受けることを契機に、半原系統からの余剰水分与を辞退し、続いて海軍から施設の貸与を受けていた走水系統の返還を求められた。

有馬系統は戦況悪化の中、突貫工事で進められ昭和二十年(一九四五)十一月三十日に完成した。

●戦後の横須賀軍港水道

昭和二十年八月十五日、日本は米国をはじめとする連合国に無条件降伏し終戦を迎えた。

一方、九月一日に海軍は軍港水道の給水を一日も停止することができないため、水道施設の管理運営を横須賀市に引き継ぐことを申出て、横須賀市と海軍は管理委託契約を締結した。

水道事業の管理運営を引き継いだ横須賀市は、大蔵省に国有財産の払い下げを申出
ていたが、昭和二十九年(一九五四)九月一日に、大蔵省から横須賀市に払い下げ許可
が下り、海軍に所管していた水道施設は横須賀市所有の公有財産となった。

横須賀市は、昭和六十三年(一九八八)から平成元年(一九八九)にかけて、上郷水管橋の塗装工事や水道みちの沿道の水道管の保護工事を実施し延命化を図り、その後も継続して送水を行っていたが、平成十九年(二〇〇七)四月一日、水重要の減少、水質の悪化、施設の老朽化により送水を休止し、平成二十七年(二〇一五)二月一日に廃止した。

水道みちは完成から約百年の長きに渡り、海軍施設や横須賀市民へ水を供給し続け、ここに役目を終えたのである。